

2024年5月30日

世界の人びとのための J I C A 基金活用事業
終了時活動報告書（2023 年度採択案件）

1. 業務の概要	
（１）案件名	ブラジル・パラグアイにおける農業・林業・福祉・教育の連携による障がい者エンパワーメント
（２）実施団体名	なつかしい未来協議会
（３）実施期間	2023 年 10 月 6 日～2024 年 4 月 30 日
（４）実施国	ブラジル・パラグアイ
（５）活動地域	バイア・ゴイアニア・クリチバ・アスンシオン首都圏
（６）活動概要	<p>①活動の背景：</p> <p>本事業の実施団体であるなつかしい未来協議会の事務局スタッフ・菅由美子は、平成 24 年当時、NPO 法人グローバル園芸療法センターの理事として、JICA 草の根技術協力事業『ブラジルにおける障がい者インクルージョンのための園芸療法』のプロジェクトマネージャーを務め、パラグアイでも成果を発表しました。草の根協力事業実施後、東日本大震災やコロナ禍を経て、新潟県佐渡島を拠点とする在日日系ブラジル人を中心に障がい者をエンパワーする事業を実施するためのチームを編成。本事業におけるブラジル側のカウンターパート「アートとインクルージョン研究所」Instituto Arte e Inclusão (INAI)、およびパラグアイ側のカウンターパート Idea との協力体制のもと、ブラジルおよびパラグアイ現地における、生産年齢に達した障がい者に対する教育や職業訓練による経済的自立の支援の一環として、竹を活用した支援の可能性を探るべく、本事業の実施に至りました。</p> <p>②活動の目標：</p> <p>新潟県佐渡島の循環型社会の林業（竹、森林）と里山有機農業の知識・技術・文化を生かし、農業・林業・福祉・教育を連携させた障がい者・社会的弱者のエンパワーメントプログラムを通して、障がい者が自尊心を持って生きることが出来る社会づくりを目指す。</p>

2. 業務実施結果
<p>（１）実施した内容</p> <p>実施内容①【日本における竹の活用～文化と伝統～】</p> <p>＜ブラジル＞</p> <ul style="list-style-type: none">● 2024/1/10～1/23 バイア：ブラジルの伝統武術であるカポエイラを通したつながりから、アグロ

フォレリーなどについて学ぶとともに、これまで日本で培ってきた竹に関する経験を共有し、竹を生かした持続可能な循環に関して意見交換を行なった。

- 2024/01/25 ゴヤス州立大学（以下 UFG と記載）内の UFG 農学学校にて、活動計画会議と活動場所の訪問（ゴイアニア）（先方参加者：UFG 農学教授を含めた大学教員）
- 2024/01/26 （午前）郊外の市有地にある竹林にて、竹林管理のワークショップを実施
 - ・ UFG 農学校の学生やゴイアニア市の住民などが参加し、竹林の管理方法を学ぶとともに、枯れた竹の伐採や運搬も行った。
 - （午後）農学部の竹林にて、アントウアンテという種の竹の管理に関するワークショップを実施
 - ・ インド原産の竹（典型的なアントウシュランテ）とコロンビア原産の竹（セミ・スプレティング）に関する管理方法について学ぶと共に意見交換を実施した。
- 2024/01/29 （午前）「日本における竹の活用～文化と伝統～」イベント開催：オープニングセレモニーおよび講演を実施、（午後）ビリンバウワークショップを実施
 - ・ カポエイラの楽器の一つである竹製ビリンバウの制作と演奏を行った。
 - ・ 参加者：ゴイアニア市民、UFG 農学校の学生 開催場所：UFG 農学校
- 2024/01/30 竹のおもちゃワークショップ実施（開催場所：UFG 農学校）
 - ・ 午前は竹のおもちゃワークショップで制作する水鉄砲、竹とんぼなどのおもちゃについて教授や大学関係者に作業方法を共有。午後は UFG 農学校学生生徒に対してワークショップを開催した。
- 2024/01/31 筍ワークショップ実施
UFG 農学学校の学生たちは筍の収穫時期や方法について実践を交えながら学び、筍を収穫。収穫した筍を実験室に運び、筍の調理方法を学んだ。調理後は全員で筍を食した。
- 2024/02/01 竹楽器ワークショップ実施（開催場所：UFG 農学校）
地域の人々、UFG の音楽・パフォーミング・アーツ・スクールの教授や音楽を専攻する生徒も参加し、竹を用いた打楽器や笛など様々な楽器を各々が選択して制作した。最後には、制作した楽器を使って演奏を行った。
- 2024/02/02 （午前）オーストリアの Gerrando Organic Foods 社による肥料生産における竹の使用についての講義とディスカッション、（午後）「日本における竹の活用～文化と伝統～」イベント閉会式
- 2024/02/03 ゴイアニア日系ブラジル人協会を訪問
敷地内で行われていた和太鼓のレッスンへの参加に加え、夜に開催されたすき焼き祭りにおける文化発表会にも UFG 農学学校の学生たちと共に参加した。
- 2024/2/8～28 クリチバ：生まれ育った故郷であるクリチバの日系会館にて、これまでの日本での生活で培った経験等を共有。

実施内容②【農林・福祉・教育の連携による障がい者のエンパワーメントプロジェクト】

<パラグアイ>

- 2024/03/02
獣医師・農学者・遺伝学者教授の指導のもと、農場にて以下の活動を実施。
 1. 竹林を訪問
 2. マテ茶の害虫駆除のための *Lonchocarpus albiflorus* の関連栽培を用いたバイオコントロール技術を見学し、学んだ。

- 2024/03/04
パラグアイ 17 県を代表するパラグアイ生産者組合のメンバーなどとのミーティング実施。
- 2024/03/05
パラグアイ県サブカイ市にあるタクアラ・レンダ訪問。当地では、パラグアイ原産の竹 38 種（パラグアイで唯一のジェモプラズムバンク）とパラグアイの土壌に適応した外来種を 30 年の歳月をかけて栽培している。
- 2024/03/06
ルケ市のヌエバ・エスペランサ・デ・ローレルティのコミュニティである先住民族アソシエーション API の集落を訪問。アカラプア・パヴェの先住民芸術学校の工芸工房を見学。
- 2024/03/07
・ヴィア・レンダ協会にて意見交換。本協会はルガル・デ・アレグリア（「喜びの場所」）として、スポーツ、音楽、絵画、ダンス、文化イベント、手工芸、小旅行などのレクリエーション活動を通して、障害を持つ若者たちの情緒的能力を伸ばし、社会参画を支援している。
- 2024/03/08
JICA パラグアイにて、これまでの活動報告
- 2024/03/09
・カアグアス市で開催されたパラグアイ 17 県を代表するパラグアイ生産者連合の総会に参加。
・ビジャリカ市にて、国立ビジャリカ・デル・エスピリトゥ・サント大学（以下、UNVES と記載）と会談。UNVES の施設を竹の栽培の拠点として提供、竹に関するワークショップ開催が可能となる。
- 2024/03/11
・バナナの葉（*Musa x paradisiaca* L.）を使った手工芸品を作る陶芸職人の中心地を訪問。
・ITA で最も著名な竹籠編み職人とも面会。
- 2024/03/12
・パラグアイ共和国 国会訪問、公聴会参加
パラグアイの国立大学 農業工学部、林業工学部、国立林業研究所（INFONA）、環境省・パラグアイ持続可能開発（MADES）では、竹の研究が行われていないため、竹の利用を実施するための検討可能性について述べた。
- 2024/03/13
・パラグアイ共和国 国会訪問、公聴会参加
・VIA PRO DESARROLLO（ヴィア・プロ・デベロップメント）を訪問
・保健専門家博士との会合。
・カルロス・エンリケ・ヒキシマ氏がパラグアイ共和国文化遺産協会から表彰される。

（２）実施成果：

かつて新潟県佐渡島は良質な竹の産地として有名であり、竹細工も盛んに行われていた。しかし、現在ではその面影はわずかにしか見ることができず、竹林の荒廃による影響なども示唆されている。そのような中で、竹の持つマルチな才能に着目し、竹林整備から竹細工、筍と多岐にわたって活動を十数年間続けてきた。今回の事業を通して、遠く離れた異国の地でも同じように竹の持つ可能性に着目し、竹に魅了され、熱心に活動を行っている組織や人々と交流することができた。また、現地でのワークショップや面会を通じて、これまでに培ってきた竹の経験を共有し、障がい者や社会的弱者の後押しに繋がる一つの切り口として、彼らの経済的自立に向けた職業訓練や施設での教育の一環に竹を取り入れていくという試みも行った。それぞれを取り巻く環境や持っている技術は違えど、竹という一つの共通のツールを通して、新たな人間関係の構築や技術・知識の共有ができたことは、今後の活動にもつながっていく、非常に大きな一歩になった。

（３）得られた教訓など：

ゴイアニアでの UFG 農学校教授や、パラグアイでの活動・各所への訪問を通して、現地原産の竹や現地の土壌や環境に適したコロンビアやインドが原産地である外来種など、これまでに出会ったことのない多くの品種の竹に出会い、海外における各品種に適した栽培や活用方法を学ぶことができた。また、日本、新潟県佐渡島で利用している竹についてもこれまでの経験を踏まえて意見を交換し、互いに新しい情報を共有することができた。原産地も、現地の環境も土壌も、その活用用途も異なる竹について、お互いに培ってきた経験を共有することで、改めて竹の持つ大きな可能性について再認識することができた。加えて本事業では、これまでに培ってきた竹の経験を共有し、竹を用いた手工芸品制作などによって障がい者や社会的弱者の経済的自立を後押しするための一つの方法としての可能性を模索した。今回の活動はブラジル・パラグアイでの竹を用いた活動という新たな試みだったが、UFG 農学校でのワークショップ、現地日系ブラジル人協会や障がい者施設への訪問、竹に関わる職人たちや先住民族との意見交換や知見共有など、多岐にわたる人々との関わりを持つことができた。現地でこのように多くの関係性を築くことができたことは、竹を生かした活動を行っていく上で非常に大きな一歩になった。ゴイアニア日系ブラジル人協会への訪問など、現地での人のつながりから経験できた出来事もいくつもあった。本事業では、竹をメインに活動して行っただが、これらの経験から日本の持つ影響力の大きさについても身を持って感じる事ができた。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：

現在ブラジルやパラグアイでは、食材として、燃料として、資材として活用することのできるマルチな才能を持つ竹が、持続可能な社会を実現していくための大きな可能性を秘めているとして注目されている。一方で、日本、新潟県佐渡島は古くから良質な竹の産地として知られており、竹細工が有名である。その歴史が築き上げてきた竹に関するノウハウを本事業を経て、さまざまな団体や人々と共有し、また、現地ならではの竹との関わり方を学ぶことによって、竹の持つ新たな可能性や試みについても考え、理解を深めるきっかけとなりました。今後は、各機関との横断的な関わりによって築いた関係性のもと、本事業で共有し、学んだ知識を技術として昇華させ、相互の発展に活かすべく、将来的なプロジェクトの実現に向けて活動していきます。最後になりますが、改めて現地での活動を支援して下さった INAI、IDEAS Paraguay をはじめとした関係者の皆様、そして JICA 基金を通じて活動機会を提供して下さった関係者の皆様、多大なご支援をいただき本当にありがとうございました。

活動の写真
＜ブラジル＞



竹楽器の制作



制作した竹楽器を使って演奏



肥料生産における竹の使用についての講義とディスカッション



「日本における竹の活用～文化と伝統～」の閉会式

<パラグアイ>



パラグアイ生産者組合のメンバー達と



先住民族アソシエーション API の集落を訪問



タクアラ・レンダにて



パラグアイ生産者連合の総会后に